第三百八十二回　青葉会

平成三十年二月二十二日（木）午后五時半～九時　文京区民センター

〈選者〉
◎川口孤舟

〈出席者〉
大林猛　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　小西弘子　豊田ゆたか　山内天牛
伊賀山そらお　今井紀久男　楠田彦十　小早健介　朱牟田恵洲　土谷堂哉　中野一灯
古田昇　星田啓子　宮内規雄　山崎亜也　山田けい子　渡邊盛雄
赤田堅　安部眞希子　今井紀久男　在間千恵　庄司龍平　早川允章　福島正明
M・S氏　村田くに子　山本三重

〈投句〉

《互選句》

六点
わろてんか雪国育ち又転び　紀久男（猛・忠・龍・ゆ・天・三）
◎水仙の囲む日溜りすべり台　弘子（眞・紀・猛・忠・孤・M）
◎死ぬはずのない奴が逝き春寒し　恵洲（紀・猛・孤・弘・允・天）
◎降りしきる雪やじょんがら聴いてみる　啓子（紀・孤・千・龍・正・く）
◎七段が一段になり夫婦雛　けい子（紀・忠・孤・弘・千・ゆ）
代筆で届く書状や冴返る　孤舟（忠・龍・允・正・天）

五点
菜の花の群の彼方に伊豆の海　そらお（弘・千・ゆ・M）

四点
（湘紅会万歩会）
バレンタインデー病院食にチェコ添へて　紀久男（眞・忠・弘・天）
（天…「添へて」→「添ふる」）
寒空に吟をぶつけて我一人　猛（堅・紀・弘・龍）
さへずりや山懐の禁猟区　孤舟（眞・五・天・三）
漁火の消えて岬の春の星　仝（堅・ゆ・允・正）
冬ざれて訃報メールの余白かな　彦十（眞・紀・忠・龍）
流木のオブジェ河原に寒月光　一灯（猛・弘・ゆ・允）
春立つや新刊抱え神保町　仝（五・龍・ゆ・く）
水音の空へ抜けゆく春の野辺　孤舟（堅・五・ゆ）
ふらここを漕ぐたび空の入れ替はる　仝（五・弘・千）
◎四つ隅をとことん磨く春の窓　弘子（孤・正・三）
畝深き丘の畑や犬ふぐり　仝（眞・ゆ・正）
手術するもせぬもリスクや冴返る　健介（紀・く・天）
◎春立つやほどよく出来し茹で卵　恵洲（眞・孤・M）
豆を撒く百寿摺り足福は内　堂哉（猛・ゆ・三）
◎低き軒連ねし路地や干鰈　ゆたか（孤・く・天）
春の月黒髪唄ふ淀屋橋　けい子（紀・忠・三）
快癒祈（ね）ぐ立春茜の筑波山（つくば）かな　紀久男（五・ゆ）

二点
◎玉三郎のお軽切なく春歌舞伎　忠彦（紀・孤）
豆食へば妻の手も伸び追儺の日　仝（紀・猛）
冬ざれて都電線路の堅き音　彦十（弘・く）
◎今度こそ本の形に二月尽　五郎太（紀・孤）
瀬戸の島かがやく春の影を曳き　ゆたか（猛・M）
寒禽の鋭声禅定解くとき　一灯（弘・ゆ）
◎神鼓鳴る海の回廊淑気満つ（宮島）　昇（紀・孤）
日の丸弁当残さずに食む建国日　仝（堅・天）
陰雪を漸くに消す陽や嬉し　亜也（紀・M）
残雪を蹴散らし歩む孫を連れ　天牛（紀・く）
◎生きてゐることを悦ぶ猫の恋　盛雄（孤・五）
生き生きとキタサンブラック北の春　仝（紀・猛）

一点

古びたる社を飾り梅一樹　そらお（五）
豆撒や細々続く我家でも　猛（堅）
休刊日手持無沙汰の冬の朝　仝（千）
春菊の香りと青さ鍋に満つ　仝（堅）
冬空に千切れたゆたふ茜雲　仝（M）
両陛下観る襲名の春歌舞伎　忠彦（紀）

（二月歌舞伎座・夜の部）

今月もまた偲ぶ会早春賦　五郎太（紀）
浅春や花屋の中をのぞき込み　仝（千）
春一番鳥語を解す人も居て　健介（五）
峡晴れて雪解の瀬音いや増せり　一灯（允）
やれ愉し霜の柱を踏む朝（あした）　啓子（三）
背を丸め熱きジャズ聴く冬籠り　仝（紀）
二ン月の風に吹かれて退院す　規雄（允）
若夫婦買う壷焼きは南仏風　亜也（正）
凍空に皆既月食赤黒し　天牛（忠）
粕汁は函館育ちの義母の味　仝（紀）
襲名披露きら星役者の二月かな　仝（紀）

（両花道に幹部・花形勢揃いで祝う）

●次回青葉会

三月二十二日（木）午后五時半～八時半　文京区民センター
当季雑詠各自五句　投句は二句
四月二十六日（木）　仝

❀　❀　❀

〈頂戴しました年賀状より〉

金色に帯してセーヌ河初茜　弘子
揚れあがれ富士より高く凧（いかのぼり）　允章
孫受験絵馬柄選びスマホかな　龍平
雪叩く片付け過ぎの書斎窓　仝
佳き年の始まらむとす初明かり　長谷見敏
恭順の犬は腹見せ御慶かな　新居　齋
一剣の刃文の乱れ淑気満つ　熊谷國男
駅急ぐ黒き隊列息白し　植田　滋
八十八仕事始めの句に悩み　横山義雄

以上　文責　紀久男

平成三十年二月　句会報

一　今回は天牛さんら7名出席。投句１３名。世話役の小生は怪我にて欠席。忠彦さんに代わって頂きました。

今月に入り万里子先生御体調宜しくなく選句は叶いません。五月井の頭公園吟行に介添付きでご一緒できますことを願うのみです。

猛さんの披講で開始し御覧のように弘子さん、恵洲さん、啓子さん、けい子さん、小生の五名が六点句の成績でした

二　関係者近詠

アーメン澄むボーイソプラノアドバント　眞希子
聖樹にも願掛け短冊商店街　〃
非常食期限の切れて冬ぬくし　〃
打出しの太鼓背に酉の市　弘子
逆上り今日もここまで冬すみれ　〃
お豆腐東葱三歩の間や商店街　〃
十二月猫には布の猫の家　〃
断捨離や妻の眸に深冬色　青史
自販機のつり銭五円悴む手　〃
なまこ食ふ頭尾不明の不埒さを　〃
年越せるそれが佳きことこの年の　〃
―「森の座」三月号
粛々と師を迎える日梅咲けり　盛雄
春愁や道頓堀に華語あふれ　〃
春一番鳥語の解る人のゐて　健介
引籠りへ手差し伸べん春一番　〃
春一番法事最中の寺揺らす　紀久男
春旅や司馬遼語る菜の花忌　〃
―きさらぎ句会２月
跳ね橋を上げさせ春の船通る　正明
騒ぎ立つ生贄の海や春闌る　〃
延々と続く調弦春の宵　〃
魚は氷に鳶は大きな輪を描き　允章
ふんはりと雲を遊ばせ春立ちぬ　〃
繊月の梢にかかりて冴返る　〃

年の市亡妻偲び百合根買ふ　規雄
―「ＮＨＫ俳句」　二月号　今井聖選
家族写真凧真ん中の笑顔かな　〃
―ＮＨＫ俳句　三月七日放映（Ｅテレ）
今井聖選→「凧（いかのぼり）家族写真の真ん中に」
人の上に人を作らぬおでんかな　恵洲
―「ＮＨＫ俳句」　三月号　西村和子選
冬服といふは釦のとれ易し　丹野敦雄
―「俳句」三月号名村早智子の秀逸。対馬康子の佳作
野の鳥の生活を助く刈田かな　盛雄　（１２／２０）
秋澄むや左脳のさえる夜明け前　〃　（１２／１３）
蒼天にミサイルの影鵙猛る　〃　（１２／６）
生傷は力士の矜持秋闌ける　〃　（１１／２９）
凡庸に生きて優遊大根蒔く　〃　（１１／２２）
―毎日新聞兵庫文芸　若林京子選（５週連続）
風花の日は東京に空が有る　恵洲
風やみて野焼日和や村総出　〃
来ぬと決め温め直すおでんかな　〃
仁左・玉三郎の切符を譲る二月かな　紀久男
病床に声色つかふ節分会　〃
快癒してすみれ満開の我家かな　〃

三　金子兜太（二月二十日九十八歳で逝去）の追悼特集「俳句あるふぁ」春号より
へ自選１２句〉を紹介します。

水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る　暗黒や関東平野は火事一つ
曼珠沙華どれも腹出し秩父の子　猪が来て空気を食べる春の峠
湾曲し火傷し爆心地のマラソン　梅咲いて庭中に青鮫が来ている
銀行員ら朝より蛍火す烏賊のごとく　麒麟の脚のごとき恵みよ夏の人
人体冷えて東北白い花盛り　酒止めようかどの本能と遊ぼうか
二十のテレビにスタートダッシュの黒人ばかり　狼に螢が一つ付いていた

昭和３７年「海程」を創刊。当時片倉チッカリンの社長が同人で句会場として社長室や会議室を提供していた由です。

以上
紀久男記

平成三十年年三月十六日